

発行：学園都市大学古文書研究会  
発行責任者：代表 吉田健一



## 公開講座

### 「幽霊の発生」

#### 怪談から見直す日本文化論

東北大学大学院教授

佐藤弘夫氏

八王子学園都市大学いちよう塾主催の公開講座「幽霊の発生 怪談から見直す日本文化論」が、講師に東北大学大学院教授 佐藤弘夫氏を迎えて四月十八日、八王子市学園都市センター・イベントホールにて開催された。

社会の世俗化が進む江戸時代でなぜ怪談が隆盛したのか、日本人の生死感がなぜ劇的な変化を遂げたのかを浮世絵の原図や怪談話の刊本を示しながら解説された。講演概要は次の通り。

今海外では日本のアニメやゆるキャラ、ホラー等のサブカルチャーと呼ばれる大衆文化に人気が高まっているが、なかでもホラーと縁のある幽霊怪談話がなぜ江戸時代に隆盛したのかを知ることによって日本人の世界観の本質に迫れないか考えてみた。

浮世絵怪談「さらやしき」やお岩さん、桜騒動からも分かるように幽霊は江戸時代に大衆文化となったもので、中世にはいません。この訳を知る手がかりとしてお墓について調べてみると、江戸時代のお墓には法名ないしは戒名が刻まれているが、鎌倉や室町時代の中世のお墓には何も刻まれていないことが分かった。これは静岡県磐田市の中世の墓地とされる一の谷遺跡から出土し

た墓石や火葬した骨を埋め川原石を積んだ墓からも窺い知れる。中世のお墓にはそこに誰が眠っているかの標識がないのである。また、十二世紀に描かれた「餓鬼草紙」にはお墓の死体を食べている風景が描かれているが、亡くなるとお墓に置き去りにされたり、弔った

形跡の五輪塔はあるがそこには死者の名前は刻まれていることがわかる。「天狗草紙」には中世の霊場高野山奥の院に骨を運んできて骨を納め卒塔婆を立てる風景が描かれている。同じ中世の霊場松島の雄島には人骨が散乱していた。つまり中世前期平安から鎌倉時代にかけては、この世にいる人は救われない、亡くなつた人はお墓にいないのではなく救済者がいるとされる異次元の理想世界（西方浄土）に旅立つと信じられていた。中世の死者は匿名化するのである。

一方、中世の普通の人々の精神世界を知る手掛かりとなる中世後期に流行していた起請文

には、この世で罰を与える仏として具体的形のある仏像のみが記載されている。このことから中世後期室町時代から西方浄土の思想が薄れてゆき目に見えるものしか信じない一種の世俗化、近代化が始まつて来たのではないかと考えられる。

死んだ人が遠くに旅立たない。死者がこの世にとどまるのでこの世に死者の数が増えていき、生きている人と死者と一緒に住むようになる。そこで生きている人と死者が住む場所を分けて越境しない契約を結ぶようになったと考えられる。死者の指

定されたところが墓地である。狭いところに押し込められたので圧倒的に死者が不利になる。そこで、お彼岸に墓参りをしたり、お盆に死者を家に迎え入れたり、寂しくならないようにお経の聞こえる境内にお墓を作つたりする等の契約条件が付けられた。

江戸時代になってどうして幽霊が大量に発生するのか。それは生きているほうが一方的に契約を破棄するところからきている。「諸国百物語」、「法華験記」等の例にあるように、死者が理不尽な扱いをされることが増えてきた。そうになると、死者は契約を守る必要がなくなり公然とお墓から出てきて復讐を遂げる。約束を破つたものに落とし前を付けるのが江戸時代の幽霊怪談の特徴である。江戸時代の幽霊文化が底辺の民衆まで普及し現代まで続いてホラー文化になった。

中世や近世では目に見える世界と目に見えない神仏や死者の世界がある親和性を持つて共存していた。言い換えると、人と人との間を神仏が緩衝材になって埋めていたが、近代以降では神仏や死者を追い出してしまい人間が直に向き合つて傷つてあつている状況が見られる。昔、神が住むと考えられていた無人島を廻つて国家間で衝突したりするなど異常なナシヨナリズムが台頭してきている。ゆるキャラやペットブームは現代人の悲鳴の裏返しではないか。なぜ人間は目に見えない神仏や死者を必要としているかを考えていきたい。

